

■藤原保昌 貴族。武勇に優れ道長四天王の一人。横笛の名手で、のちの牛若丸のような丈夫な優男のプロトタイプになった。

ふじわらのやすまさ

・ ・ ・ ・ ・ 958＝ 藤原南家巨勢麻呂流，右京大夫藤原致忠の子に生まれる。母は，元明親王の娘。

延喜式施行・ 967＝ 9歳：

安和の変・ ・ 969＝11歳：

・ ・ ・ ・ ・ 976＝18歳：

往生要集・ ・ 985＝27歳：

尾張百姓訴え 988＝30歳：この年には，円融院判官代になっている。

・ ・ ・ ・ ・ 992＝34歳：長野県大町市の霊松寺には，
“信濃鎮撫使”として仁科に着任し，のちに，孫の保近が菩提を弔うため，居館を保昌院と改めたという伝説がある。日向守，

・ ・ ・ ・ ・ 994＝36歳：

花山法皇事件 996＝38歳：

武家の家柄では無く，受領階級の官人ながら，武勇に秀でて，藤原道長・頼通父子の家司も務め，源頼信・平維衡，致頼とともに道長四天王と称され，のちに，(源)頼光四天王の一人に列せられることになる。

・ ・ ・ ・ ・ 1003＝45歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1005＝47歳：肥後守，大宰少貳と九州地方の地方官を務めるうち，財力を蓄え，

・ ・ ・ ・ ・ 1009＝51歳：この年死去した村上天皇の第七皇子具平親王の千種殿という豪壮な邸宅を伝領，

・ ・ ・ ・ ・ 1010＝52歳：正五位下に叙せられる。

・ ・ ・ ・ ・ 1011＝53歳：従四位下に昇叙され，

和漢朗詠集・ 1012＝54歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1013＝55歳：大和守兼左馬権頭に任ぜられる。この頃，道長の薦めで，その娘彰子に出仕していた，女流歌人和泉式部の最後の夫として結婚，和泉式部に紫宸殿の梅を手折って欲しいと請われ，警護の北面武士に弓を射掛けられるも，なんとか一枝を得て愛を射止めたという逸話があり，京都の祇園祭の保昌山のモチーフにもなっている。保昌自身も風流を解する歌人であり，没後の「後拾遺和歌集」に和歌作品1首が採録されている。

・ ・ ・ ・ ・ 1020＝62歳：この頃に丹後守に任ぜられ，妻の和泉式部と任国に下る。

・ ・ ・ ・ ・ 1021＝63歳：

「十訓抄」には，丹後国に下向のおりに，与謝山で騎乗したままの白髪のお武者に出会い，郎党達は礼を失したこの人物を‘奇怪なり’と咎めようとしたが，一騎当千の馬の立てざまから保昌は‘ただものにあらず’と見抜き通過した。やがて多くの従者を率いた平致経に行き会い，老武者が致経の父平致頼であると知ったという説話が載っているが，‘優れた武者を見通した保昌もまた優れた武者である’ことを表すものである。

・ ・ ・ ・ ・ 1025＝67歳：大和守(再任)，

藤原道長没・ 1027＝69歳：

摂津守となり，摂津国平井に住したことから平井保昌とも呼ばれる。

平忠常追討・ 1030＝72歳：

正四位下に至り，

・ ・ ・ ・ ・ 1036＝78歳：没した。

中世文学のなかで，坂上田村麻呂・藤原利仁・源頼光とともに，中世の伝説的な武人4人組の1人と紹介された。「今昔物語集」には，朧月夜に一人で笛を吹いて道を行く者があり，それを見つけた袴垂という盗賊の首領が衣装を奪おうと後をつけたが，恐ろしく手を出すことができなかった。その者が保昌で，逆に袴垂を自らの家に連れ込んで衣を与えたところ，袴垂は慌てて逃げ帰ったという。